

## 5)ギョウジャニンニクの特性と栽培法

十勝農業試験場 研究部 園芸科

### 1.試験のねらい

ギョウジャニンニクは、滋養強壮によく美味しい山菜として古くから愛好され、近年は北方系機能性食品・医薬品原料として注目されている。しかし、現状では山採りに頼り、資源枯渇の危機に瀕している。そこで、増殖法や作物としての栽培の可能性を検討した。

### 2.試験の方法

- 1)生育調査：山採りした個体および播種した個体の生育経過を調査した。
- 2)採取地別個体群間の差異の検討：道内外30余ヶ所の自生地から山採りした個体群を採取地別に自場に植え込み・採取地別にその特徴を比較した。
- 3)栽培法の検討
  - (1)種子による繁殖法
  - (2)養分の吸収経過と施肥の効果
  - (3)生食用軟白法の検討

### 3.試験の結果

- 1)播種後発芽すると、その年は土中で小さな鱗茎をつくる。翌春、葉が1枚、その翌年に葉が2枚出る。早ければその翌年に開花する。収穫するためにはさらに2年必要である。収穫回復するまでには、3年必要。毎年利用するためには3ヶ所で育てる必要がある。
- 2)採取地別個体群は、株分けや年数を経過しても、萌芽期や開花期の早晩、葉の形、葉のツヤの有無などの特徴は変わらなかった。今後、成分・利用適性の差異と、この特徴が種子繁殖で遺伝する性質なのかを検討したい。
- 3)花球(ねぎぼうず)上部の果実が裂開し、下部は退色した頃に採種し、そのまま播種(採り播き)するとよく発芽する。その年は敷きわらなどで凍上を防ぐとよい。
- 4)萌芽から開花期頃、盛んに養分を吸収する。春に施肥すると翌春の萌芽が早く、さらに春施肥すると枯凋がおそく、鱗茎の肥大もすすんだ。生育年限の短縮を期待できる。
- 5)もみがらを6cmほど敷くと、軟白の長さが適当で、生食用に利用できる。

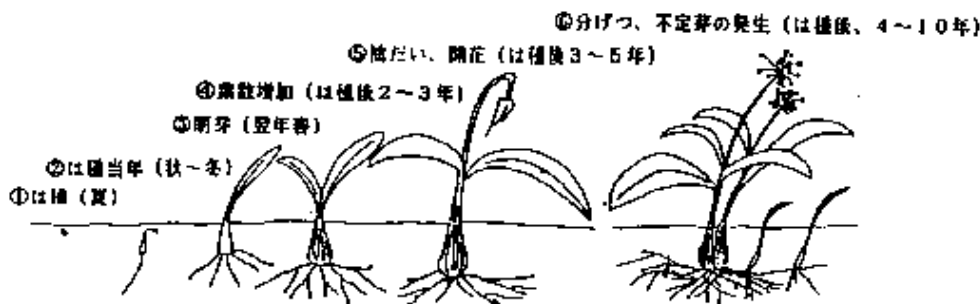


図1 ギョウジャニンニクの生育経過

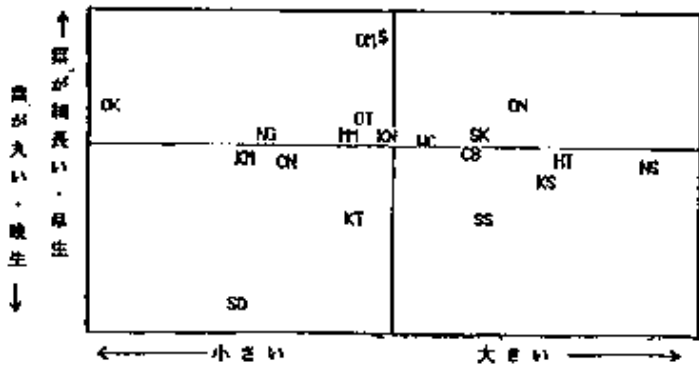





図2 採取地別個体群間差異

表1 種子の採種時期と翌春の圃場出芽率

播種時期			
	播りまき	採りまき	裂開後採種10日後
出芽率(%)	15.3	40.0	9.3

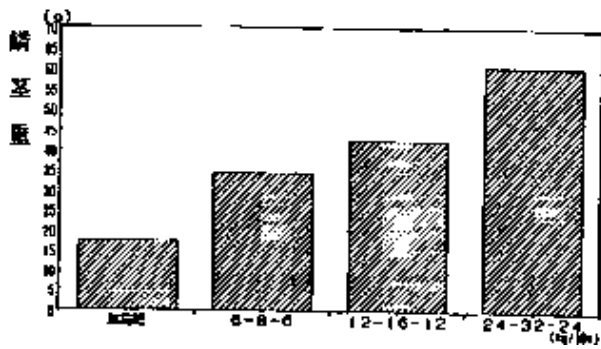


図3 施肥法と秋の鳞茎乾燥重(収穫なし)